



## なぜ反原発運動なのか

\*\*\* チェルノブイリ・福島事故追悼礼拝に参列して\*\*\*

アッセで反原発運動をする  
ピッシュョフさんは70年代、  
両親に「どうしてナチスの  
政策を許したのか」ときい



たことがあった。両親は目をふせ「私たちは何も知らなかった」と答えたという。ドイツでは戦後、子どもたちがこうして親に真実を迫る場面がたくさんあった。

それは原発についても通じる、とピッシュョフさんはいう。何十年も後に子や孫から、「どうして危険な核のごみがこんなにあるの、どうして原発を許したの」と聞かれた時、「知らなかったから、と言い訳するわけにはいかない。後の世代のために精一杯できることをしたい」と思い、原発の即時停止と安全な廃炉と核廃棄物処理を求めている。

ドイツではキリスト教が独自の意見を持つことは許容されており、しばしば各地域の住民たちの意見を代弁している。核廃棄物の処分を3つ抱えるニーダーザクセン州にあるプロテスタント宗派は、反原発の姿勢を明確に打ち出す。2015年4月にヴォルフスビュッテルで開かれたチェルノブイリの事故を追悼する礼拝(写真)で、神父は「福島やチェルノブイリ原発事故の生んだ惨状は今後二度とあってはならない。特に子どもを被ばくから守らなければならない」と演説し、5つの反原発運動グループもそれぞれの思いを述べた。

ベラルーシの首都ミンスクから同じく礼拝に参加した物理教師のアンナ・フィットセバさん(60歳)の事故当時の住まいはチェルノブイリ原発から75km離れたところ。避難区域でなかったためそのまま住み続けた。4年後に父親が肺がんで亡くなったのをきっかけに、政府から許可が出て600km離れたところに引っ越した。しかし12年前から具合が悪くなり、甲状腺の機能低下と診断された。今でも疲れやすく、肌や視力など健康上の問題が絶えない。「政府は何も言わず、危険だと知らなかった。原発の近くに住み続けていた親戚は、7年後ぐらいにみな亡くなった」と話し、福島の人々を心配している。

被ばく者の悲しみと悔しさ、そして怒り。「信じていたのに裏切られた」という理不尽な思いが、反原発運動の根底にある。政府や電力会社の誠実な対応があれば、もっと状況は違ったのではないだろうか。

ごみかんドイツ特派員 田口 理穂

## ドイツで子育て

ここ1ヶ月ぐらい、日本語の補習校の件でかかりきり！ ハノーファーでは小1から高3の日本国籍を持つ子どもを対象に各学年週45分間、日本語教室があります。これは州政府による出身国授業のため無料で、州内ではトルコ語やスペイン語など20カ国以上の授業が行われ、ハノーファーだけで53人の先生がいます。日本語は1986年に日本企業誘致の目的で始まりましたが、その後駐在企業の子どもは減り、現在はハーフと駐在の子どもたちが2対1の割合で全部で40人ほどいます。

ところが20年以上教えてきた先生が今夏定年退職するのをきっかけに、州は打ち切りを決定。それは困ると親有志で署名を集め、嘆願書を出し、州と交渉しています。明はまだ小学2年生でこれから先長い。それでなくとも日本語の学習はおぼつかないのに、補習校がなくなったらどうなることか。漢字がなかなか覚えられなくても、国語の教科書を開き友達と学習する機会があるのが大事なのです。

ところで、8月里帰りします。明が長野県で小学校に通っている間、東京でみなさんとお会いできるのを楽しみにしています。 ☆詳細は11ページをご覧ください

